

## (12) 罪の赦し

村上伸

民数記 21 章 4 節-9 節  
ガラテヤの信徒への手紙 2 章 15 節-21

「聖霊を信ずる」ということは、私たちの中に聖霊が働いて私たちを結びつけ、「聖なる公同の教会」が形成されていくことを信ずるということです。前回まで私たちが考えてきたのはそういうことでした。「聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わりを信ず」。そういう風に第三項は展開されているわけでありませう。

さて、そのことは、私たちの生活の中で具体的に言うと何が起こるのか、という問いになります。一言で言いますと私たちは罪の赦しを信じることができる、そのことが私たちの中に起こるのです。使徒信条においては「聖霊を信ずる」という告白は、「罪の赦しを信ず」という告白に展開します。そこで私は、今日は「罪の赦し」について語りたいと思います。

ちょっと話が飛ぶようではありますが、私は敗戦の時は十五歳の少年でした。戦争中は陸軍の学校に行っておりましたので、そこで軍国主義的な思想を骨の髄までたたき込まれました。天皇中心主義の考え方ですね。それが敗戦と共に崩れました。ですからちょうどマインドコントロールを受けたオウムの人たちが今まで信じてきたことが崩れた後、人格のまとまりを失って非常に苦しい状態に置かれているということをよく聞きますけれど、私にはそれがよくわかります。今まで信じていたことがすべて崩れて、すべての価値が崩壊する。私は内面的に壊れてしまったような具合になりまして、途方に暮れて彷徨していました。そういう生活を送っていたわけですが、その中で一人の大変親切な人に出会ったのです。他には何にも希望や支えはありませんでしたが、たまたま私に対してとても親切にしてくれたその人の優しさだけが私の支えでした。ところがその親切な優しい人に対して、私はある日酷いことをしてしまいました。口にするのも憚る位に恥ずかしい事ですが、その人の事を罵り、そしてその人の顔を叩いたのでした。私自身が荒れていたから、そういう事になったんだろうと思いますが。その人はその時、大変悲しそうな顔をして涙を流しました。私は自分のやった事に対して、御免なさいって素直に謝ることができずに家を出ました。でも何処にも私の寄る辺というものはない訳ですから、結局一日外をふらついた末に、そのまあ巣みたいなところですが、そこに戻ってきた。そしたら、その人が私の事を大変心配して、一日中待っていたらしいのですが、帰ってきた私を受け入れてくれました。私のした酷い事については一言も言わないで受け入れてくれたのです。

これは実は私にとって、ちょっと大袈裟かもしれませんが、原体験とも言うべき出来事でした。私は赦された。そう思ったのです。そして在るが儘の自分、こんな醜い自分が受け入れられていると、そう思いました。この経験は私にとって決定的でした。とても赦してもらえないようなことをした私が、赦されて受け入れられたのですから、それがどんなに感謝すべき事であるかという事を、当時の私は十五歳の少年でした

から、上手くは言えませんでしたけれども、その時は心から詫びました。この出来事は、私の精神に深い印象を残しました。赦されるという事がどんなに感謝すべき事であるか。私は今日に至るまで、その日の事をありありと思い出して、恐れの心を持って繰り返して反省しています。

そのことがありましてから一年ぐらい経ってから、私は聖書を読むようになりました。不思議な事がありまして、聖書を開くようになったのです。聖書を読んで直ちに理解できた事が一つあります。それは「ああ聖書には赦しの事が書いてあるんだな」という事でした。勿論、読んでも分からない事が沢山ありましたが、この一つの事だけは分かりました。神様が罪深い人間を赦して下さる。聖書にはそのことが書いてあるんだ、と思ったのです。聖書の中心的なテーマであるこの事が、私の心にはずっと入ってきました。私はその事をどんなに感謝しているか分かりません。聖書を読んで分からない事はいっぱいあると思いますけれど、しかし本当に大切な事が一つでも分かれば、聖書は私たちのものになるんじゃないでしょうか。そういう私の経験もありまして、聖書の中心的なテーマは、「罪の赦し」だと思うようになりました。

民数記の21章に不思議な話が出てきます。青銅の蛇の話ですね。イスラエル民族が神とモーセに逆らって罪を犯したという事が書いてありまして、そのために裁きを受けて、炎の蛇、つまり強い毒を持った蛇に咬まれて、みんながどんどん死んでいくというそういう出来事です。それで人々はその事を恐れてモーセのところにやって来て、どうか私たちのために神様に祈ってくれ、私たちからあの炎の蛇を取り除けてくれとお願いをした。その時、神がモーセに言われた言葉が8節です。「主はモーセに言われた。『あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれたものがそれを見上げれば、命を得る。』」モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」これは不思議な話です。旧約聖書学者はいろいろ調べた。これは土着の信仰・宗教と関係があるんじゃないかという説明もなされています。それはそれで有益ですけども、私にはこの青銅の蛇の話は一つの点で非常に面白い、私たちにとって大切な話ではないかと思っています。

それはどういう事かといえますと、自分の罪を自分で最終的に解決する事はできないという事です。罪を犯したイスラエルの人々にその罪を解決するという事は彼ら自身には出来ませんでした。そこでモーセに頼んだのです。でもモーセにも出来ません。モーセは神に祈りました。そして、神から示されたように青銅の蛇を造って掲げた。「人々はそれを見上げる事しか出来ない。しかしその事が力を発揮したというのです。

私は聖書の中にしばしば出てくる思想が少し違った形ですけども、此処にもあると思います。それは、自分の罪というものは自分では乗り越えることができない、その解決はただ、他者からくるという事です。私たちの生活の中では、実は時々、自分で自分をジャスティファイする自己義認が起こっています。しかし、それは本当は私たちには出来ない事、私たちがやってはならない事でしょう。

今、薬害エイズの問題で責任者が裁判にかけられていますけれども、この人たちは自分は正しい事をしたんだ、自分は悪くないといっています。これはこの人たちだけの事ではなくて、色んな形で私たちは自分を正当化しようとしています。自分は良いという判定

を自分で下そうとしています。しかしそれは本来、私たちに出来る事ではありません。本当はそういう事は不可能です。自分の犯した罪や過ちに関してどんなに自分で自分を正当化しようとしても、それは不可能です。義とされるのは、ただ他者によります。

あの青銅の蛇を高い旗竿の上に掲げてみんなが仰ぎ見たという事は、その一つのしるしではないかと私には思われます。

三浦綾子さんの『氷点』という小説のヒロインの陽子という娘さんは、自分が殺人犯の娘であるという事を知って生きていけなくなる。そして自ら命を絶とうとした。そういう話なのですが、三浦さんはあの小説の中で人間の罪の問題について考えたかったんだ、と言っています。陽子は、自分が罪の中に生まれたという事に、どうしても耐えることができなくて、死を決意する訳ですけれども、彼女は遺書の中に、「おとうさん、おかあさん、どうかルリ子姉さんを殺した父をおゆるし下さい。今、こう書いた瞬間、『ゆるし』という言葉にハッとする思いでした。私は今まで、こんなに人にゆるしてほしいと思った事はありませんでした。けれども、今、『ゆるし』がほしいのです。おとうさまに、おかあさまに、世界のすべての人々に。私の血の中を流れる罪をハッキリと「ゆるす」と言ってくれる権威あるものがほしいのです。」と書きました。

「私の血の中を流れる罪をハッキリと『ゆるす』と言ってくれる権威あるものが欲しいのです。」この言葉は問題の本質を突いていると私は思います。赦しが必要です。私たちはみんな罪深い存在ですから、赦しというものを信じることなしには生きていくことができません。赦しが必要だ、赦しが欲しい！ 陽子というあの娘は血を吐く思いでそう書きました。人間は誰でもそうではないでしょうか。

しかしその赦しは、決して自分の中からは来ません。他者から来ます。神から来ます。イエス・キリストから来ます。私たちはそれを仰ぐことしかできません。イスラエルの人々が青銅の蛇を仰いだように、私たちはただそれを仰ぐことしかできないのです。

このことをガラテヤの信徒への手紙は別の言葉で書いているわけですね。2章15節以下に「信仰によって義とされる」と言われているのは、そういうことなのです。自分で自分を義とすることはできない。敵しは自分の中からは決して来ない。神から来る。他者から来る。イエス・キリストから来る。そのことを私たちはただ信ずる以外にないのです。

しかしそのことを信じる時に、イスラエルの人々が青銅の蛇を仰ぐことによって救われたように、私たちは救われます。義とされるのです。16節には「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」とあります。さらに、「律法の実行によってはだれ一人、義とされない」ともあります。この「律法の実行」というのは「自力」のことです。「私はこれこれの良いことをやった。私にはこれこれの功績がある。だから私は義とされる。」そういうことを人間は本来言えないというのです。徹底的に考えれば、人間にはそうしたことは言えない、私たちはただ自分の罪を知ってひれ伏すだけだ。けれども、律法の実行によってはだれ一人義とされないが、赦しは神から私どもに与えられます。私たちはそのことを信ずる以外にないのです。「律法の実行によってはだれ一人義とされない」というのは、その辺の事情を明らかにした

言葉だと思えます。

罪深い存在である自分を自分で正当化したり、自分で義としたり、自分で赦しを与えたりすることは、私たちには許されてはいません。赦しを自力で勝ち取ることは私たちにはできません。それはただ、キリストが私たちの罪を負って苦しんで下さった、というそのことによってのみ与えられます。そのことを信じることによって初めて私たちは義とされる。罪の赦しが起こるのです。

私たちは先程から繰り返しておりますように、罪深い存在です。赦されるということがなければ、私たちは生きていくことができません。聖書はそのことを書いているのです。旧訳でも、例えばイザヤ書の53章にも、そういうことが書いてあります。「主の僕」のような存在、私のために苦しむ存在によって、そして神の力によって私たちは赦される。このことを信じる。これがキリスト教信仰の核心です。

ですから使徒信条の中でも、「我は聖霊を信ず」という告白の後で、つまり人間生活の中で実際に起こることとして、「罪の赦しを信ずる」ということが出てくるわけですね。ルターはこう言ったそうです。「例え天と地が崩れてすべてが残らなくても、この箇条だけは、退けることも譲り渡すこともできない」。それ程の重みを持っているということでありましょう。

最後に「罪の赦しを信ずる」という告白から、どのような具体的な結果が生じるかということについて述べたいと思えます。それは一言で言うと希望、あるいは喜びということになります。自分がどんなに弱くても、自分がどんな重い罪を背負う存在であるとしても、ただそれだけのものではない、ということを知ることです。私は確かに罪人です。しかしそういう自分が赦され、受け入れられている。そのように自分を見ることが出来る。罪の赦しを信じるということは、自己を新しく理解することです。そのことによって新しい自己理解が生じます。私のような者でも赦されている、と自分を見る。ですから、ガラテヤ書の2章19節以下にはこう書いてあります。「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」この言葉は新しい自己理解を示すものだと言ってよいでしょう。自分は本当は死ぬべき存在であるが、その死ぬべきものが、キリストと共に十字架につけられて死んでしまった。今、私は復活されたキリストと共に生きている。いや私の中にキリストが生きておられる。そういう風に自分というものを理解する。キリストを信じるということは、新しい自分を信じることです。こうして、新しい自己理解が私たちの中に起こるのです。それが「罪の赦し」の信仰がもたらす帰結でしょう。そしてこの他者についても同じように言えるのです。自分を新しく理解したものは、他者をも新しく理解しなければなりません。どうしても放すことができない気持ちになることが人間にはあります。「絶対にゆるせない」と今でも恨みに思っている。誰でも一人や二人、そういう人を心の中に持ってるんじゃないでしょうか。それが人間の生活というものでしょう。しかしそのような人に対しても、あああの人にもキリストにおいて赦されていると信じる。自分だけが新しい自己理解を持つだけでは足りないのです。罪深い私が赦されていると信じると同様に、他者に対しても同じことを信じなければ、それは理屈に合いません。あの人にも神の赦しをいただいている。これは決して証明

できることではありません。信じなければならないことです。あの人も神の赦しの下にあると信ずるのです。新しい自己理解は、新しい他者の理解と結びついていなければなりません。それが私たちの生活であろうと思いますし、そしてそれは必ずできる筈です。神に赦して頂いた自分たちは、そのことによって他の人たちも赦しを受けていると信じる。そしてそれは、私たちが他の人を赦す力を必ず与えてくれる筈です。

(日本基督教団みくに伝道所 1997年3月16日礼拝説教)